

愛媛水平社100年記念大会に参加して

大阪の和太鼓集団「絆」の演奏に始まった愛媛水平社100年記念大会は、愛媛県民文化会館を会場に盛大に催されました。愛媛県人権対策協議会会長代行の山先芳輝さんの挨拶では、今後私たちが「部落差別の完全解消」のために取り組むべきこととして

- ①「部落差別解消推進法」のさらなる具現化
- ②差別を包括的に禁止する法律の制定
- ③差別被害者を救済するための法律の制定
- ④差別を審判し、被害者救済のための機関の設置
- ⑤これらにつながる教育と啓発の展開

の5項目を挙げられ、「水平社の精神を受け継いできた私たちは、その目指すところである、『よき日のために』を必ずや早期実現につなげていかなければなりません。」と、訴えられました。

基調では、「愛媛水平社100年記念大会は、記念とする行事ではありませんが、決して100年を祝い喜ぶことは致しません。私たちが取る立場は、100年を振り返り、100年経っても未だに不合理な偏見が残り、部落差

二百文字の手紙の朗読では、四国中央支部からは《中学校の卒業生》より《後輩の皆さんへ》と題して、

同和教育を受けている皆さんに聞いて欲しいことがあります。私は同和地区の男性とお付き合いしています。彼を両親に紹介しましたが、両親の考えはとて古く『とにかくこの結婚はいかん』の一点張りでした。このように現実には部落差別はあるのです。私も直面して初めてこの差別の現実を肌で感じています。親を変え社会の因習を変えていくのは私たちの責任だと思います。どうか共に差別をなくす仲間になってください。

という手紙が朗読され、大きな共感の拍手が起こりました。

「100年のバトンをどう受け継ぐのか」と題したシンポジウムでは、パネラー兼コーディネーターに山口県人権啓発センター事務局長の川口泰司さん、パネラーに、人権テイク・クルーの坂田かおりさん、部落解放同盟兵庫県連合会書記次長の北川真児さんが登壇されました。

心に残ったことを紹介します。まず、学校で行われる同和問題学習の授業についてです。

○結婚差別の資料を見直してほしい。どの資料も、厳しい差別の現実から入っている。

別が発生することに

対する強い怒りの思いを共有して、『差別の完全解消』を勝ち取るために決意を新たに、次の第一歩を踏み出す機会にするものです。」と差別の現状を残した状態で

は祝うことはできないと訴えています。また、その現状に対して、「我々は声を大にして、『差別を受け継がず、連鎖を断ち切れ！』『差別する者よ、恥を知れ！差別に頼る生き方を恥じよ！』と、もう一度叫びを上げましょう。」と、呼びかけています。

「人が生きる上で差別は不要であり、取組や対応の必要がなくなれば、社会にかかる負担がなくなり、人心の安定にも世界の平和にも大きく貢献できるのです。あらゆる差別の完全解消は、今の社会に生きるすべての人が取り組むことによって成し遂げられるのであり、『人権』を人類共通の大切な財産として確保するために、私たちの運動は寄与することになるのです。」と謳い、最後に「本日、今ここから、『よき日のために』共に歩みを進めま

『差別なんかもうない。』という意見に対しては有効だけど、マイナスの出会いをさせてしまっている。マイナスからスタートしてしまおうと、その後どうやってプラスに持っていくのか。

○差別の厳しさだけを教えていくと、忌避意識が生まれてしまう。地区の人の生き方から学ぶなど、展望を持たせた授業をしてほしい。

○差別をする生き方はかっこ悪いという思いを持たせる授業がよい。例えば、ヘイトスピーチが行われている集会の周りで、カウンター（反対集会）に多くの人が集まっている。その人たちはマイノリティ（当事者である少数派）ではなくマジョリティ（当事者でない多数派）であった。この問題は、当事者の問題ではなく我々多数の日本人の問題である、と集まってきたという。このような事例をロールモデルとして、差別をなくす生き方は、かっこいい“と感ぜさせる授業を構築して欲しい。

次に、先人から学んだ生き方として
○周りの意見に左右されるのではなく、『自分の生き方は自分が決める』というアイデンティティをしっかりと持って欲しい。
○先人の生き方からまず差別を見抜く目を養



しょう。」と結んでいます。

続いて愛媛の解放運動のスライドショーが上映され、愛媛での差別の実態から、水平社の設立、戦後の解放運動の様子を伝えてくれました。宇摩支部が1925年に設立されたことも紹介され、「人権の詩人」と称される四国中央市出身の江口いとさんの「私はもう、この差別から逃げることをやめました。ニッポリと迎えることに決めました。前にも後ろにもレッテルをしっかりと貼って歩きます。全国にこの不合理を叫び続けて歩きます。」という言葉が紹介されました。また、愛媛県同和対策協議会（現愛媛県人権対策協議会）が1961年に結成され、愛媛独自の「対話と協調」「行政と共闘」「教育との連帯」という3つの柱は現在でも引き継がれていることが確認されました。2018年7月発生した西日本豪雨災害のときにボランティアとして入ってくれた全国の「なかま」に、全国青年集会・全国高校生集会で宇和島の高校生を初め愛媛の参加者が立ち上がってお礼の言葉を伝えたことも紹介されました。そして最後に、「私たちは、差別がなくなる日が、遠くないことを願っています」「私たちは、歩みを進めましょう。よき未来へ」「人の世に 熱あれ、人間に 光あれ」と結びました。

い、具体的な差別をなくす闘いを学ぶことを通して、人が人を差別しないですむ生き方を構築していく必要がある。

○水平社から100年の成果は、差別をなくすために闘ってきた先人の生き方にある。差別をなくす生き方は、すべての人たちの幸せをめざす生き方でもある。

○人は尊敬されるべきものである。この気持ちがあれば、誰もが幸せになれる。

○差別は誰を不幸にするのか。ムラに入ってきてほしい。こんな温かいところ、幸せなところはない。このムラと出会えないことは不幸である。

○100年間差別と闘ってきた生き方は、どのような立場であろうと、引き継げる生き方ではないか。などの意見が交わされました。

100年経っても祝うことができない現状を西光さんたちはどう思うでしょうか。祝える日を一日でも早く迎えるために自分に何ができるのかを考えさせられた一日でした。



（文責：三島南中学校 久賀 寿一郎）